

言葉と読書

目次

言葉について I

言葉について II

- 一、 おしゃべり
- 二、 話をする
- 三、 文章を書く
- 四、 結び

読書とは

(対話形式)

読書について

- 一、 読書の方法
- 二、 狭義の「読書」
- 三、 愛読の極致
- 四、 結び

*

*

言葉について
I

言葉について

乱れた言葉を平気でどんどん使える

その心が、すでに乱れている。

荒廃した言葉を平気でどんどん使える

その心が、すでに荒廃している。

人は、これをなかなか認めたがらないものであり、口では愚かで幼稚なことをあれこれ話しているけれども、しかし、「頭の中」(或いは「心の中」)では、かなり高邁こうまいかつ高遠な世界をさまよっているんだけれども、ただそれをうまく言葉で表現できないだけなのだと、あるいはただ口にしないだけなのだと、人はよく言いますが、もちろん、そういう場合も多々あるだろう。しかし、また、われわれが日常あれこれと話をしている言葉や取りのなかには、自ずからその人の「人となり」というものがあらわれるものであり、――また、「文は人なり」という言葉があるが、それは、いったいどういう意味かと言えば、それは、文章作成にあたっては、その人なりに何度も吟味を重ね尽くして、その人なりに「これでよい」というものになっているだろう。ならば、……

その文章には、必ず、その人なりの「思い」が込められているだろう。

その文章には、必ず、その人なりの「考え方」があらわれているだろう。

また、使う言葉の流れは、すなわち、その人の「思考の流れ」であり、

また、使う言葉の流れは、すなわち、その人の「心情の流れ」でもあり、

さらに、使う言葉は、その人とともに存在するという意味合いでもあって、

使う言葉が乱れている、いかげんである、あるいはあいまいであるとすれば、それは、やはりその人の「思考や心情」が乱れている、いかげんである、あるいはあいまいであるとみても、それほど大きな誤りにはならないだろうと思う。

なぜなら、ほんとうにその人が人間として「成長・成熟」してくれば、自ずといかげんでたらめな、あるいは意味のない言葉などを、平気でどんどん使ったりするようなことは、できにくくなるだろうから。もちろん、時に応じて、冗談を言い合ったりするようなことは、当然あるだろうが……。

――使う言葉は、つねにその人とともに存在するのであって、

使う言葉が乱れるのは、すなわち、その人の「心の乱れ」から生じるものであり、

言葉は、単なる意味を伝えるだけの道具や記号とは、少し違ったものになるだろう。

――言葉は、もつと正確に、もつと的確に使うべきであり、そうすることによって、初めて、物事をより正確に、より厳密に「判断し、評価し、認識する」ことができ得るようになるのである。逆に、「言葉」というものを、いかげんに、あいまいに使っている限りは、いつまでたっても、あいまいでいかげんな「判断、評価、認識」しかできないことになるのだろう。

それは、いつ頃のところからはよくは知りませんが、

恐らく、「道徳」という言葉から「モラル」という言葉に変わった頃から、「道徳」というものがあいまいになり始め、そして、

「パパ」「ママ」というような言葉が流行し始めた頃から、恐らく、「父親」「母親」の存在というものがあいまいになり始めたのではないだろうか……。

——「語感のない」言葉が、「あいまい」な言葉が、あるいは「確かな手応え」のない言葉が、社会や巷ちまたに満ちあふれ、そして、乱れ果てるるとき、恐らく、人間の「思考能力」は、ますます低下し、精神も乱れはじめ、そして、あらゆるものが「あいまい」になっていくだろう……。

これは、少し話が違っても知れないが、「バベルの塔」というのは、多くの人がよくご存知だろうと思う。ちなみに、辞書で引いてみると、「ノアの大洪水の後、人々が天に達するような高塔を築き始めたが、神は人間の僭越をにくみ、人々の言葉を混乱させ、その工事を中止させたという。……」

(創世記十一章)

言葉が乱れ、混乱することは、

すなわち、人間の精神が乱れ、混乱することである。

それは、なぜか？ なぜならば、

「言葉はそも、人とともにあるがゆえなり……」。

*

*

言葉について
II

言葉について II

言葉などはいかようにも使用できる。

人は平気でうそをいうではないか！
でたらめなことを平気で並べ立てるではないか！

言葉ほどあてにならないものはない。

言葉など、どうして信じられようか！

もちろん、「疑う精神」は、「健全な精神」であり、盲目的に信じるよりは、よほど重要かつ大事なことになるのだろう。ただ想うに、言葉の「使い方」には、次の二通りの使い方があるのかも知れない。つまり、言葉をただ意味を伝えるだけの道具、あるいは記号に過ぎないと考えて使っている人と、言葉を大事と感じて、自分の「思いや考え」のすべてを、「使う言葉」になかに吹き込もうと努めている人とがいるのだろう。

なるほど、前者の人の「使う言葉」は、それほどあてにはならないかも知れないが、しかし、後者の人の「使う言葉」は、ある程度までは信じていることができるのではないだろうか。なぜなら、一つ一つの言葉を手のひらに乗せて、その言葉の「色艶（いろでん）、重さ、響き、広がり、意味、姿（すがた）・形、その他」などをじっくりと見極め、十分に消化をして、その人なりに、いわゆる「自分の言葉」として使用し、しかも、人間や様々な物事の「本質、真理、真実、源泉、その他」などを重視した「思考（思索）活動」を行なっているからである。

さて、われわれ人間が、ふつう「言葉」を使う場合というのは、大きく分けて、次の三つぐらいの場合があるのではないかと思う。つまり、

一つは、日常、比較的軽い気持ちで相手と言葉を交わす場合の「おしゃべり」。

一つは、ある程度、まとまった内容を人に伝えるために「話」をする場合。

一つは、自分の思いや考えを伝えるのに話し言葉ではなく、「文章で書く」場合。

すなわち、「おしゃべり」と「話をする」それに「文章を書く」という、この「三つの場合」があるということである。

一、おしゃべり

まず最初は、「おしゃべり」について、少し話してみたいと思うが、確かに、われわれ人間は、ふだんずいぶん安易に「言葉」というものを使用しているかも知れない。また、言葉を使っているのか、言葉に使われているのか、よく分からない場合も多々あるかと思う。しかし、それは、多くの場合、「おしゃべり」の時であり、比較的軽い「おしゃべり」などをしているような時ではないだろうか。

つまり、「おしゃべり」というのは、相手の言葉に対する「受け応え」であり、その人が、相手の言葉に対してどう対応するかは、その人のその時々の「心の状態」に大きく左右されるものである。つまり、相手の言葉に対して、素直にまた真摯な態度で応える場合もあれば、逆に、相手の言葉に対して、はぐらかしたり、うそをついたり、あるいは冗談を言ったり、ふざけたりするような場合もあるのだろう。

しかし、たとえそれがどのような対応の仕方であれ、それは、その時々その人の「心

の動き」から生じて来るものであり、それゆえ、例えば、その人の言葉の「微妙な動き」というものは、そのままその人の心の「微妙な動き」の表れであり、それゆえ、その人の言葉の「微妙な動き」（それは微妙な「言葉の流れなり、言葉の抑揚なり、言葉の強弱なり、言葉の内容なり」）を、しっかりと見極める、聴き分けることこそ、何よりも大事なことであり、そうすれば、相手の人が、一体、どのような「心の状態」から、そのような言葉を使ったのか、また、相手の人が、一体、どこまでほんとうの話をしているのか、それとも、いいかげんな話をしているのか、そういうことが、その人なりに識別出来るようになるだろうし、また、その時々気まぐれな「心の状態」から生じてきた言葉などにも、それほど意味なく振りまわされることも少なくなるのではないかと思う。

そして、その時々その人の「心の動き」をしっかりと見極めることも、むしろ大事なことであるが、しかし、最終的には、その人のその時々気まぐれな「心の動き」をあれこれ意味なく追うのではなく、もつとその人の「心の底」にある、その人自身の「本質的な部分」をしつかりと見極め、掴むことこそは、何よりも大事なことになるのだろう。そして、その人の「本質的な部分」をしつかりと見極め、掴んでしまえば、その人が、たとえどういふことを言ったり、行なったりしても、それほどさういふ「表面的な言動」などに意味なく振りまわされることも、少なくなつて来るのではないかと思う。

確かに、われわれ人間は、うそをついたり、いいかげんなことを言ったり、あるいはでたらめなことを並べ立てることがあるかも知れない。しかし、それは、その人が「うそをついてやろう、いいかげんに受け応えておこう、あるいは人をだましてやろう、あるいはさういふふうを受け応えておいた方が、自分にとつて都合がよいだろう」というような、さういふその時々その人の「心の動き」から様々な言葉となつて、外に現われて来るものであり、それは、使われる言葉とそれを使う人間との間には、極めて親密な関係があるということである。——つまり、使われる言葉は、必ずそれを使う人の「心の動き」を受けて、表に現われて来るものであり、それがたとえうそであれ、いいかげんなことであれ、それは、その時々その人の「心の動き」から生じて来るものであり、なぜ、うそを言うのか、なぜ、いいかげんなことを言うのかは、その人のその時々「心の動き」に大きく左右されるものなのである。

それでは、なぜ、われわれ人間は、「うそ」を言うのかと言えば、それにはもういろいろな理由があるかと思う。例えば、ほんとうのことを言えば、何らかの意味で自分の立場が不利になるような場合もあるだろうし、また、うそを言つて相手をうまくだますことによつて、何らかの利益を得るような場合もあるのだろう。また、その場の雰囲気や気分などを盛り上げるために、うそや冗談などを言つたりする場合もあれば、また、誰かをかばつたり、あるいは病気や様々な秘密などを公にすれば、かえつてその人を傷ついたり、気落ちさせるのを避けるために、うそをつくような場合もあるのだろう。また、人間関係を円滑にし、できるだけ相手との不必要な摩擦を避けるために、いわばその「潤滑油」として使われる場合も多いのだろう。そのように「うそ」といつても、いろいろな場合があり、そのすべてが悪いというのではなく、やはり「うそ」を言うことによつて、例えば、人を傷ついたり、欺いたり、あるいは何かをだまし取つたりするような、いわゆる「うその悪用」こそは、最もよくないことになるのだろう。

話を元に戻したいと思うが、使われる言葉は、必ずそれを使う人の「心の動き」を受け

て、表に現われて来るものであり、それゆえ、それがたとえうそであっても、いいかげんなものであっても、必ず、それは、その時々その人の「心の動き」のはっきりとした表れであり、それゆえ、使われる言葉とそれを使う人間との間には、切っても切れないほどの深い関係があるということである。つまり、使われる「言葉」というのは、勝手に存在するのではなく、必ずそれを使う人の「心の動き」を受けて、表に現われて来るものであり、それゆえ、使われる言葉は、必ず、それを使う人の「心の動き」を何らかの意味で反映し、表していることになるわけである。それだけ「言葉」と「人間」との関係は、どこまでも親密かつ切っても切れないほどの「深い関係」にあるということである。

そして、大事なことは、表面的な「言葉の意味」だけに振りまわされずに、どういう「心の動き」から、そういう言葉が表に現われて来たのか、その「真意」をしっかりと見極めることこそは、最も大事なことになるのだろう。つまり、表に現われて来た「言葉」を、そのまま盲目的に信じるのではなく、表に現われて来たその「言葉」を手がかりとして、その人の「心の動き」や「真意」というものを、しっかりと見極め、聴き分けることこそ、最も大事なことになるということである。

それじゃ、やっぱり言葉は、信用できないということじゃないですか……。

むろん、「言葉を否定することは、すなわち、人間を否定することである」。なぜなら、あれこれものを考えたり、こうして話をしたり、あるいは、「新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、その他」、何であれ、人の話を聞いたり、人と話をしたり、本を読んだり、あるいは独り物想いに耽ったりするようなこと、それらすべては、「言葉」を使って行なわれている。その「言葉」を否定したら、一体、どういうことになるのだろうか？

例えば、睡眠中は、どうだろうか？ もし夢を見ているならば、そこには、何らかの言葉が存在するだろう。もし、夢を見ていないならば、恐らく、言葉は、存在しないだろう。しかし、それは、人間としては、ほとんど「死」に近い状態である。また、生まれたばかりの赤ん坊は、どうだろうか？ 恐らく、その赤ん坊の「頭の中」には、まだこれという「確かな言葉」は、存在していないかも知れない。しかし、それは、「人間らしい活動」は、まだできないという状態である。つまり、現時点においては、まだまだ「動物的な存在」に極めて近いと言えるものである。やがて、人間らしくなるのは、ただ単にからだが大きくなるからではなく、むしろ言葉を使つてものを考えるようになるからである。

われわれ人間は、夢を見ていない睡眠中か、まだ、言葉を知らない赤ん坊の時以外は、一時たりとも言葉なしでは生きられないほど、たえず言葉を使つてあれこれ思ったり、考えたりしているわけである。それゆえ、言葉がなくなれば、われわれ現代人は、ものをあれこれ考えたり、人と話をしたり、また、生きていくことすらできないほどである。——つまり、言葉があればこそ、われわれ人間は、人間としての様々な活動ができるのであり、もし言葉がなければ、われわれ人間は、ほとんど人間らしい活動はでき得ないだろう。そこにあるのは、いわば本能的な（或いは動物に極めて近い）活動だけになってしまいうだろう。そして、ある人が、毎日、休みなく「頭の中」や人との話のなかで使っている言葉というものは、おのずからその人の「精神」を形づくっているものであり、それゆえ、使う言葉がいいかげんである、あるいはあいまいであるとすれば、それは、その人の精神がま

だ「未熟」であるとみても、それほど大きな誤りにはならないだろうと思う。つまり、それだけ「言葉」と「人間」との関係は、極めて親密かつ微妙であり、どこまでも深くからみ合い、切っても切れない「不可分」な関係にあると言えるものである。

また、若い時には、とかく自分の思っていることと口から出てくる言葉とが、かなり食い違ってしまうことも多く、自分でも、「なんでこんなまずい受け応えなのか」、自分でもあきれてしまうことが多々あるかと思う。その理由としては、むろん、話をすることにまだ十分に慣れていないからであるが、それに加えて、「言葉」が、まだ「借りもの」であり、使う言葉が、その人自身のなかで十分に消化されて、いわば「自分の言葉」になっていないからである。つまり、自分と使う言葉との間には、かなりの「距離感」（隔たり）があるからである。しかし、それも、やがて人間として真に「成長・成熟」してくれば、次第に使う言葉との間の距離感もうすれ、自分の「思いや考え」などを、大体、思い通りに言葉で表現できるようになるものである。また、そうなることが、人間としての一つの大きな「成長・成熟」でもあると言えるものである。

一方、相手の話していることが、果たしてほんとうのことなのか、それともうそを言っているのかは、なかなか判別しがたいものであるが、しかし、話をしてる当人には、自分がうそをついているのか、ほんとうのことをいっているのかは、はっきりと自覚を持って話していることがふつうであるから、自ずとその人の「心の動き」が、その人の使う言葉にも微妙に反映されるものである。つまり、使われる言葉は、それを使う人の「心の動き」を受けて、表に現われて来るものであり、それゆえ、必ず、その人の「心の動き」を何らかの形で反映しているものであり、相手の「顔の表情や動作」などはもとより、その人の使う微妙な「言葉の流れなり、言葉の抑揚なり、言葉の強弱なり、言葉の内容なり」を、じっくりと深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」、深く厳密に識別する、そうすれば、ある程度は、その「真偽」を判別することもでき得るのかも知れない。——例えば、孔子の「六十にして耳に順う」という有名な言葉があり、それにも幾つかの「解釈」があるかと思うが、その一つとして、相手の微妙な「言葉の流れなり、言葉の抑揚なり、言葉の強弱なり、言葉の内容なり、その他」などを深く厳密に聴き分けているだけで、その人の『人となり』というものが自ずと見えて来るというものである。また、よく相手の身になって考えてみるという言葉があるが、それは、対象を「内から観る」（つまり「対象そのもの」になりきってその対象を内から観てみる）という見方であるが、そのような「見方」なども、ある程度までは、相手の「心を読む」ことができ得るのかも知れない。とは言え、やはり、現実には、相手の人がどこまでほんとうのことを言っているのか、それとも、うそをついているのかを、はっきりと判別することは、なかなか難しいことになるのだろう。

二、話をする

次に、「話をする」というのは、ほとんど「おしゃべり」と同じようなものである。ただ、「話をする」というのは、ある程度、まとまった内容を相手に伝えるということであり、それゆえ、話す内容に応じて、やはり、それなりに言葉を選び、正確さを期し、時に

は厳密さが要求されることにもなるのだろう。だとすれば、「話をする」というのは、比較的軽い「おしゃべり」とは少し違って、自ずとその言葉には、それなりの「重み」が加わって来るものである。つまり、「言葉」というのは、一般的に言つて、正確に使えば使うほど、あるいは厳密さを期せば期すほど、それだけその言葉に「重み」が加わって来るものである。それゆえ、「言葉」というものを、あいまいに、いかげんに使用している限りは、相手に自分の思いを正確に伝えることも、人の心に強く訴えることも、また、相手の人を説得することも、あるいは話に「重みや真実味」などを持たせることも、なかなかできにくいということである。

さて、「話をする」と言つても、いろいろな場合があるかと思う。その代表的なものとしては、例えば、二人の人が様々な問題について、お互い自分の「考えや想い」などを語り合う、いわゆる「対談」形式もあれば、また、ある「テーマ」などを定めて、その「テーマ」に基づいて、何人かがお互い活発に自分の「考えや意見」などを述べ合う「座談会」や「討論会」、或いはまた、「シンポジウム」などもあるかと思う。

また、ある持ち時間、一人の人がずつと話をし続ける場合もある。例えば、各分野の人たちの「講演会」や各種の「説明会」など、また、選挙中の「街頭演説」や「立ち会い演説会」など、また、学校では、朝礼での校長の話があつたり、教室では先生の授業やホームルームなどでの話もあり、また、会社では、様々な会議での説明（報告）やら、朝、社員を集めて、その前で話をする場合もある。また、大小様々な「催し」や「集い」などがあれば、必ず、その「催し」や「集い」の代表者たちの「あいさつ」や様々な「話」などがあるかと思う。また、結婚式や披露宴での「スピーチ」などもあれば、また、それはもうどういふ場合であれ、ひとがたくさんいるところで、つまり、人前で自分の「考えや意見」などを述べる場合もあり、また、テレビやラジオなどでは、いろいろな人たちが様々な「おしゃべり」や「話をする」ことなどを行なっているものである。そして、その「話」の内容も、ごく日常的なことから、かなり専門的な問題にいたるまで、非常に幅広いものがあり、それゆえ、極めて軽い「おしゃべり」から極めて専門的な「話をする」ものまでが、極端に入り交じっている状態ではないかと思う。

そのように、人間が二人以上集まれば、そこには、必ず「おしゃべり」や「話をする」といふ状態が生じて来るものであり、それはもちろん、われわれ人間が、主に「言葉」を使つて、お互いの「意志疎通」を行なっているからであるが、そこで交わされる様々な「言葉」には、もちろん、うそもあれば、誇張もあり、あるいはまったくいいかげんなものもあるだろうから、そういうものにあまり意味なく振りまわされないためにも、相手の「言葉」をよく「聴き分ける」ことが、何よりも大事なことになるのだろう。

一方、自分の「考えや想い」などを相手に伝えようとするためには、ふつう「言葉」を使つて行なうものであるが、その場合、話す「事柄」（内容）などによつても違つて来るだろうが、とにかく、それなりに言葉を選び、そして、正確さや厳密さを期せば期すほど、それだけ話す「内容」に重みや説得力が加わるのが、ふつう一般的ではないかと思う。また、「話をする」というのは、比較的軽い「おしゃべり」とは少し違って、ある程度、まとまった「内容」を相手に伝えるということであり、それゆえ、話す「内容」に応じて、やはり、それなりに言葉を選び、正確さを期し、時には厳密さが要求されたりするものであるから、比較的軽い「おしゃべり」の時よりは、自ずとその「言葉」には、それ

なりの「重みや責任」などが加味されることにもなるのである。

三、文章を書く

最後に、「文章を書く」ということであるが、その「文章」というものは、この世の中にはもう実にいるいろいろな形式の「文章」があるかと思う。……

例えば、はがきや手紙あるいはメールなどに書く文章や日記などに書く文章、また、ビジネスなどにおける事務的な「文章や書類」などの場合、あるいは、「新聞、雑誌、書物、その他」などに記載する文章（原稿）を書くような場合、また、研究成果などを記録したり、何らかの「論文」などの文章を書くような場合、また、学生のノートをはじめ、様々な作文やレポートなど、あるいは人の話や自分の考えなどをちよつとメモるために書くようなものまで、もう実に様々な文章があるかと思うが、ここでは個人的な比較的「軽い文章」ではなく、いわゆる「本格的な文章」について、少し話をしてみたいと思う。

さて、それが「本格的な文章」ということになれば、恐らく、一つ一つの言葉を慎重に選び出し、文章を厳密に組み立て、そして、何度も「吟味」を重ね尽くしては、その人なりに「これでよい」というものになっているだろう。そして、「これでよい」という状態になったということは、一体、何を意味するのかと言えば、それは、その人の「心の想い」と「文章の内容」とがそれなりに一致しているということであり、もちろん、完全に一致することは、極めて難しいことではあるが、それでもまあまあその人なりに納得のいくような状態になったからこそ、まさに「これでよい」ということになるのだろう。

つまり、「書き言葉」というのは、「話し言葉」とははっきりと違って、必ず、何度も「吟味を重ね尽くしたもの」であり、それゆえ、それだけその「文章」には、必ず、その人なりのまさに深い「思いや考え或いは人となり」というものが、しっかりと表れているものであり、それが、まさに「文は人なり」という言葉の「真意」になるかと思う。

四、結び

以上、われわれ人間は、ふつう「言葉」を使って、いわゆる「意思疎通」を行なうものであるが、それには、極めて軽い「おしゃべり」から、かなり専門的なことについて「話をする」場合まで、と、また、文章によって自分の「思いや考え」などを表現する場合とがあり、そのどちらの場合であれ、使われる言葉というのは、必ず、それを使う人の「心の動き」を受けて、外に現われて来るものであり、それゆえ、「言葉」と「人間」との関係には、切っても切れないほど深い関係があるということである。

つまり、使う言葉がいかげんであったり、あいまいであったりするのは、すなわち、その人の「思考や心情」などがいいかげんであったり、あいまいであったりするからであり、また、その人が、毎日、休みなく「頭の中」や人との話のなかで使っている「言葉」こそは、まさにその人の「精神」を形づくっている最大の「構成要因」（つまり「頭の中」で使っている「言葉」こそは、そのままその人の「精神」を形づくっているもの）であり、それゆえ、いいかげんで、あいまいな言葉ばかりを好んで使っていたのでは、いつまで経っても、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを深く厳密にとら

えることはできにくいということである。それゆえ、「言葉」というのは、できるだけ「正確かつ厳密に使う」ことによつてこそ、初めて、物事を、より正確かつ厳密に「判断し、評価し、認識する」ことができ得るようになるということである。——だからこそ、「言葉」などは、どうしてもよいと思つてゐる限りは、恐らく、その人の人間としての真の「成長・成熟」というものは、半永久的に期待できないだろうし、それだけ使われる「言葉」とそれを使う「人間」との間には、本人にもどうにもならないほどの極めて深い関係があるということである。

*

*

読書とは

読書とは

——想うに、われわれは、一体、
何のために、また、なにゆえ、本を読むのだろうか？

それは、やはり書かれている内容やストーリーを楽しんだり、また、あれこれ知識を得たり、その他、もろもろのことでしょう……。

もちろん、その通りかも知れないが、しかし、
本を読むというのは、その書物と交わるということでしょう。

ええ、もちろん、そうですね。

「交わる」というのは、心を「通わす」ことでしょう。

ええ、まあ、そうですね。

心を「通わす」相手はなんだろうか？

それは、もちろん、本でしょう。書物でしょう。

もちろん、本であり、書物であるでしょう。

それでは、本は何で書かれているだろうか？

それは、もちろん、言葉でしょう、文字でしょう。

もちろん、「言葉」であり、「文字」であるでしょう。

しかし、言葉や文字は勝手に本の中に存在するのではないだろう。
誰かがそれらをつなぎ合わせるのだろう。

そのつなぎ合わせたものが「文章」となっていくのだろう。

もう少し詳しく話してみたいと思うが、

幾つかの単語と単語をつなぎ合わせたものが「文章」となって
いくのだろう。

ええ、まあ、そうですね。

しかし、幾つかの単語と単語が勝手につなぎ合うわけがない。

誰かがそれをつなぎ合わせるのでしょう。

幾つかの単語と単語をつなぎ合わせて文章にするのは、

誰でもない、書き手であるでしょう。

ええ、まあ、そうですね。

また、その書き手は、
でたらめに幾つかの単語と単語を結びついたりはしないだろう。
そんなことをしたらちんぷんかんぷんになってしまふでしょう。
何がなんだかさっぱりわからない文章になってしまふでしょう。
幾つかの単語と単語を結びつけて文章にするのは、
そこに何らかの意味をもたせようとするからでしょう。

ええ、まあ、そうですね。

——どういう意味をもたせるにしろ、
それは、書き手の「精神の働き」であるでしょう。
幾つかの単語と単語を結びつけて文章にするのは、
書き手の精神であるでしょう。

ええ、まあ、そうですね。

——そして、幾つかの単語と単語とが
書き手の精神によって結びつけられ文章となるとき、
そこには何らかの意味が生じる、あるいは書き手は、
そこに何らかの意味をもたせようとしている。そうだね。

ええ、まあ、そうですね。

単語というのは、もちろん、夜空に輝く星の数ほどはないにしろ、
かなり膨大な数にのぼるでしょう。その膨大な数の単語の中から、
ある特定の単語を選び出してそれらを選びつけ、そして、ある
文章にするのは、作者の精神の働きであるでしょう。膨大な数の
単語の中から幾つかの単語を選び出してそれを結びつけ、そして、
ある文章にするのは、すべて作者の精神の働きであるでしょう。

ええ、まあ、そうですね。

——だとすれば、
幾つかの単語と単語とを結びつけて「文章」にする。その場合、
その一つ、一つの単語と単語とを結びつけているのは、作者の精神でしょう。
その一つ、一つの単語と単語との間に流れているのは、作者の精神でしょう。

その文章の背後或いはその底に流れているのは、作者の精神でしょう。……

ええ、まあ、そうですね。

——ならば、本を読むというのは、まさにその作者の精神とめぐり逢うということでしょう。あるいは、その作者の精神とふれ合うということでしょう。あるいは、その作者の精神と深く交わるということでしょう。

ええ、まあ、そうかもしれません。

——本を読む。何度も何度も深く読む。暗唱できるほどに読む。それは、作者の精神と自分の精神とか一つになるということでしょう。それは、作者の心情と自分の心情とが一つになるということでしょう。

ええ、まあ、理屈の上ではそうなるのかもしれませんが。

もちろん、一つになるということは極めて難しいことであるが、しかし、作者の精神と自分の精神とは深く交わっている。

作者の心情と自分の心情とは深く溶け合っている。

そういうことにはなるよね。

ええ、まあ、そうですね。

——だとすれば、本を読んで楽しむというのは、まさにその作者の精神と自分の精神とが深く交わって、楽しむ。その作者の心情と自分の心情とが深く溶け合って、喜ぶ。そういうことになるでしょう。だとすれば、書物（本）を読んで、その表面的な内容やストーリーを楽しんだり、あるいは知識をあれこれ得たりすることとは、少し違って来るだろう。

ええ、まあ、そうかも知れません。

——本を読む。本を深く読むというのは、いわゆる表面的な内容やストーリーなどを楽しんだり、あるいはあれこれの知識を得たりすることだけではなく、実は、作者の精神と深く交わって、楽しむ。

作者の心情と深く溶け合って、喜ぶ。

それは、作者の「精神」と自分の「精神」とが親しく心を通わし、

深く交わるという、いわば「書物」を友とすることであり、

——読書の楽しみというのは、

作者の「精神」と深く交わって、楽しむ。

作者の「心情」と深く溶け合って、喜ぶ。

本来、そういうことであると言ってもよいのだろう……。

でも、嫌いな作家（書き手）であれば、その作家と深く心を通わすという

ようなことは、できにくいんじゃないでしょうか……。

——本を読む。何度も何度も繰り返し繰り返し深く読む。そういう「書物」は、その人にとって嫌いな作家（書き手）のものであることはふつう少なく、やはり好きな、あるいは興味惹かれる作家（書き手）であることが多いのだろう……。また、一般に「本」を読みさえすれば、それが即「読書」であると思っている人は非常に多いけれども、「読書」というのは、その「書物」と深く交わるということであって、その「書物」を一度読めば、あるいはその内容が分かったからそれでもうよいというものではなく、何度も何度も繰り返し繰り返し深く「読む」ことによつてこそ、初めて、その作者の「魂の鼓動」が生そのまま聴こえて来るということであり、そして、その作者の「魂の鼓動」（つまり「魂の声」）を生そのまま聴くということこそは、すなわち、真の「読書」になるのである。

——話を少し前にもどしたいと思うが、

単語というのは、もちろん、夜空に輝く星の数ほどはないにしろ、

かなり膨大な数にのぼるでしょう。その膨大な数の単語の中から

ある特定の単語を選び出し、それを結びつけ、そして、ある

文章にするわけだが、それではなぜほかの言葉ではなく、その言葉を

使って文章にしたのか、また、どうしてそのような言葉の組み合わせにしたのか、

あるいは、なぜある思いなり考えなりを表現するのに、他の表現方法ではなくて、

このような文章表現にしたのか、その他、それらはすべて作者の精神の働きであるでしょ

う。——つまり、「文章」作成にあたっては、ふつう何度も何度も繰り返し、ああでもな

いこうでもないといろいろ想いをめぐらし、想を練り直しては、ここはこういうふうにし

たほうがよいとか、あそこはあの言葉ではなく、この言葉を使った方がよいとか、その他、

そういうふうにあれこれと何度も繰り返し繰り返し吟味を重ね尽くした末に、恐らく、そ

の人なりに「これでよい」というものになっているのだろう。ならば、その文章には、

必ず、その人なりの「思い」が込められているではありません。

必ず、その人なりの「考え方」があらわれているではありません。

必ず、その人なりの「心情」が語られているではありません。

必ず、その人なりの「人となり」が表れているではありません。

そして、その文章の中に深く溶け入っては、多種多様に表現されている、その「言葉の流
れなり、言葉の抑揚なり、言葉の真意なり、言葉の姿・形」というものを、じっくりと深
く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」、そうすれば、
作者の「魂の鼓動」がまるで生のまま聴こえて来るだろう。今はもうこの世には存在しな

い昔の優れた「作者」の精神とも深く交わることができ得るだろう。つまり、「読書」というのは、表面的な内容やストーリーを単に楽しむだけでなく、また、あれこれの知識を得るといっただけでもなく、その文章の中に深く溶け入っては、その「言葉の流れなり、言葉の抑揚なり、言葉の真意なり、また、言葉の姿・形」というものをじっくりと深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」、そして、その作者の「魂の鼓動」（つまり「魂の声」）をできるだけ生のまま聴くということである……。

でも、内容やストーリーを楽しむのも、決して悪いことではないでしょう……。

もちろん、悪くはないでしょうが、しかし、ただ表面的な内容やストーリーだけを楽しむのであれば、それは、いわば「影」に酔うことであるといってもよいのだろう。もちろん、そうだと知っていて、それを楽しむのであれば、それは、それで十分に楽しめるものではあるだろうけれども……。

それにまた、あれこれの「知識」を得たりすることだって、別に悪いことではないでしょう……。

もちろん、悪くはないけれども、それは、「読書」ではない。

それは、いわば「調べもの」であると言ってもよいのだろう。

自分が欲している「知識」をその本の中から選び出すのですから……。

もちろん、本を読めば、誰だつて知らず知らずのうちには、

その作者の精神とふれあい、そして、それなりに交わっているだろう。

それは、誰だつてそうであるでしょう。それではどこがどのように違う

と言うのだろうか？ それは、いわゆる「深さ」が違うのです。

その作者とどのくらい「深く」交わったのか？

人によって、その「深さ」がみな違って来るだろう……。

——本を読む。例えば、ゲーテは、次のようなことを言っている。

「みなさんは、本の読み方を学ぶには、

どんなに時間と労力がかかるかを御存知ない。

私は、そのために八十年を費やしたよ。

しかし、まだ今でも目的に到達しているとは言えないな。」（ゲーテとの対話）

ゲーテと言えば、当時までのすぐれた書物、芸術、その他のものを

ほとんど見聴き読みむさぼった人だと言ってもよいのだろう。だとすれば、

——本を読む、ということが、如何に極難であるかを物語っている。

最後に、彼の言葉をそのまま書き留めておきたいと思うが、

「人はあまりにもつまらないものを読みすぎているよ。

時間を浪費するだけで、何も得るところがない。

そもそも人は、いつも驚嘆するものだけを読むべきだ。

私が青年時代にそうしたように……」（ゲーテとの対話）

讀書

読書について

昔から「読書」については実に数多くの人たちが言及している問題であり、それゆえ、新たに何かを書き加える必要もないのかも知れないが、敢えて「読書」について少し詳しく考えてみたいと思う。例えば、今日では、映画、テレビ、DVD、パソコン、スマートフォン、タブレット、その他の「映像」と関わる機会が非常に多くなり、また、新聞や雑誌などを読むことはあっても、一冊の「書物」をじっくりと時間をかけて深く読む機会というものは、一般的に少なくなってきたのだろう。もちろん、それは時代の流れというものであり、それは、それで仕方ないことであるが、それでも近くの書店などに行ってみると、いろいろな書籍類と同じようにそれなりのお客さんが集まっているのを見ると、いわゆる「書物」に対する「興味や関心」などは、まだそれなりに残っていることになるのだろう。

例えば、書店に並べられている膨大な量の書籍類から、どの「本」を選ぶかは、もちろん、各人一人ひとりみな違ってくるだろうが、どの「本」を選ぶにしても、「本」との出会い、「人間」との出会いと同じように何とも不思議なめぐり合わせではないだろうか。というのも、「本」との出会いも、また、「人間」との出会いも、その後のその人の人生に計り知れないほどの大きな影響を与えることが極めて多いからである。換言すれば、どのような「書物」とめぐり逢うか、また、どのような「人間」とめぐり逢うかによって、その人の一生が、ほぼ決まると言ってもよいほどの意味合いがあるということである。

例えば、「人間」との出会いの場合、家族や親戚をはじめ、学校やそこでの部活動、また、塾や習い事、その他などでの先生や友だち、また、社会人となれば、会社（職場）や趣味などでの様々な人間との出会い、また、映画やDVD、テレビやラジオ、その他などのメディアを通じての間接的な人間との出会い、それに男友達、女友達、恋人、その他、それは、老若男女を問わず、どのような「人間」とめぐり逢い、その「人間」とどのように関わり、そして、どのような影響を受けるかによって、その人の人生に測り知れない、むしろ決定的な意味や影響を与えるものである。それと全く同じように、古今東西を問わず、世に存在する膨大な量の「書籍」のなかで、どのような「書物」とめぐり逢い、その「書物」とどのように関わり、そして、どのような影響を受けるかは、その人にとって極めて大きな意味があると言えるものである。そこで書店に並べられている膨大な量の書籍類の中から、どの「本」を選ぶかは、時として、その人にとって「運命的な出会い」ともなり得るものである。それは、特に若い時にこそ、起こり得ることが多く、その人を「根底から変革させる起爆剤」ともなり得るものである。

それでは、若い時には、一体、どんな「書物」を読んだらよいのかという問題が、いつも生じて来るが、それは、どのような「書物」というよりも、その人が読みたいと思う「書物」を読めば、それでよいものである。しかし、何が読みたいのか、本人にもよく分からないという場合もあるのだろう。そのような時には、例えば、書店に並べられている膨大な書籍類をずっと目で追っていき、そして、何か心惹かれるような「書物」を見つけたならば、それを買って求めたらどうだろうか？ 家に持ち帰って、その「本」を読んでみたら、「なあんだ、自分が期待していたのとは全然違って、ちっともよくない、やっぱり買っただけじゃなかったなあ！」と思うような場合もあるだろう。しかし、それはそれでよいので、

それを部屋にある本棚の中に入れておけばよいのです。その時には、つまらないものを買って、何か損をしてしまったと思っても、あとになって、あの時、なぜ自分は、あの本を選んで買い求めたのか、よく分かる時が、必ずやってくるからである。なぜなら、その本を買い求めようとした時に、「その本にわずかでも心惹かれる」というささやかな心の動きがあったからである。なぜ、どうして心惹かれたのか当人にもよく分からなくても、とにかく心惹かれたということが確かであるならば、それは、その人自身の「心」とその書物との何かとが引き合うところがあつたということである。あるいは、その人自身の「心」が、その人自身にもよく分らないままに欲していた「あるもの」を、その書物は、何らかの意味で宿していたということである。だからこそ、なぜか気になるのであり、また、なぜか心惹かれるのは、その人自身の「心」が、何らかの意味で「興味や関心」を寄せていたものになるからである。すなわち、若い時の「心」というのは、実に様々な好奇心とともに、自分を少しでも成長させたいと望んでいるものであり、それゆえ、その買い求めた「本」が、ただ単なる「好奇心」（つまり興味本位）から心惹かれたものなのか、それとも、その人の心の奥深くに眠っている「本来の自己」が、まさに「自分自身を成長させるため」に求めたものなのか、そのどちらであっても、結局は、同じことであり、心が騒ぐ、また、心惹かれる対象とは、その人自身にとつては、何らかの意味で「興味や関心」があるものであり、そういうものから入っていくしかないだろう。

一方、何も書店で「本」など買わなくても、例えば、近くの図書館から借りて読めば、それで十分ではないかという人もいるだろう。もちろん、その通りなのであり、図書館も大いに利用して、いろいろな本を若い時には数多く読んでもらいたいと思うのです。ただ借りた本は、汚すわけにはいかないと、また、ある期間内に返さなければならぬ制限つきでもあり、じっくりと腰を据えて、長い期間にわたって何度も読み返すことには、あまり向いていないのかも知れない。しかし、むしろ「図書館」も大いに利用して、いろいろな本を数多く読んだり、あるいは何か専門的なことを調べたりする時には、図書館は、どうしても欠くべからず存在になるわけだ。とにかく古今東西の極めて数多くの「書籍」類がずらりと揃っているわけであるから、図書館こそは、まさに膨大な「知識の宝庫」であり、必要に応じてどンドン積極的に利用されたらよいかと思う。

ところで、書店で「本」を買って家に持ち帰ったあと、それをどうするかは、人によってみな違って来るだろうが、まず、購入した日付をその本に書き記しておく、あとになって、その本を何年の何月何日に買い求め、そして、何時ごろ読んだかということが分かって、非常に便利なものなのである。これは、一般にはどうでもよいように思われがちであるが、意外にそうでもなく、後年、ふり返った時に、あの時、あの本を読んだことが、自分の「内的成長」にどのような影響を与えたのか、あるいはどういう意味があつたのか、そういう自己の「内的成長過程」をあとで再確認する上でも、非常に大事なことになるわけである。——さて、新しい文庫を買ってくると、個人的にはページをペラペラと何度かめくったり、あるいは時には本を閉じたまま軽く揉んだりします。なぜ、そんな馬鹿なことをするのかと言えば、それは、「全体の文面」を見るということもあるが、主に「紙」を柔らかくするためであり、新しい紙は、なんとなく親しみにくいものだからである。つまり、手になじませるために、あるいは手になじむようにそういうことをするわけだが、それだけでも真新しい書物よりも少しでも「親しみ」を感じることが出来るわけである。

というのも、「書物」とのつき合いは、他人行儀のつき合い方であってはいけないのであり、それが自分の「本」であるならば、いたるところに傍線（赤線）や様々な書き込みなどを入れて、どんどん汚していくべきなのである。なぜ、そんなことが必要なかと言えば、それだけその「書物」に対して、「親しみ」がわいてくるからである。そして、気に入った本であるならば、その本がぼろぼろになるまで何度も読み返し、そして、何ページには何が書いてあるかが分かるくらい、その書物と深く交わることも大事なことになるわけである。もちろん、別にそんなことをしなくてもいいじゃないかと言う人もいるだろうし、また、じつくりと「読書」など行なっている時間などないという人も多いのだろう。

もちろん、「読書」というのは、他人から強制されて行なうものではなく、読みたい時に、読みたい「本」を、読みたいだけ読めば、それで十分なものであり、それ以外は、すべて余計なことになるわけだ。しかし、それでもなおこうして話をしたいと思うのは、ほかでもなく、やはり若い人たちには、できるだけ「読書」をしてもらいたいと思うからである。それでは、なぜ若い人たちに本を読んでもらいたいと思うのか？ それは、われわれ人間の、いわゆる「思考（思索）能力」を育てるには、「読書」が最適ではないかと思うからである。そして、若い時の「読書」は、できるだけ多くの書物を読むという「乱読」で十分なのである。しかも、最初から最後まで読まなくても、途中で読むのを止めてもいいし、また、二、三ページぐらいしか読まなくても構わないし、また、全然読まなくても構わないのです。よく「積読」という言葉があり、それは、本を買っても読まない人を皮肉っていった言葉かも知れないが、「積読」というのは、まったく意味がないように思われがちであるが、しかし、意外にそうでもなく、手元に「ある」ということは、いつか「読む」機会が生じることもあり、どんどん「積読」は、しておくべきなのである。というのも、その時には、まったく「興味や関心」を示さなくても、あとになって、「興味や関心」が生じて来ることは、いくでもあることであり、また、手元に「積読」しておけば、ひまな時には、ちよっと手を伸ばして、読んでみようかなあという気持ちにもなるわけで、「積読」は、どんどんしておくべきなのである。

ところで、若い時とは、いったいどういう時期なのだろうか？ それは、「肉体的にも精神的にもまさに成長期」にあたっているわけである。そして、肉体を育てるのに一番よい方法はと問われれば、誰でも、それは、何かスポーツをすることであり、何かスポーツ（或いは「運動」）をすることによって、肉体を無理なく育てるのが一番よい方法だと答えるだろう。そして、それに反論する人は、ほとんどいないだろうと思われる。それでは、われわれ人間の「精神を向上」させるために一番よい方法は、何かと問われれば、それは、人によって実に様々な意見に分かれるだろうが、その一つとして、ここでは「読書」を挙げたいと思うわけである。というのも、われわれ人間のいわゆる「思考（思索）能力」というものを真に育て上げるには、やはり「読書」が最適ではないかと思うからである。

「読書」とは、広い意味では「書ヲ読ム」こと全般のことであるが、若い時には、いろいろなものができるだけ数多く「乱読」しておくことが大事であると思うとともに、狭い意味での「読書」も、それは、一冊の「書物」をじっくりと時間をかけて深く読むことも、その人の「思考（思索）能力」を真に育て上げるには、極めて大事なことになるのである。しかも、それは、娯楽性の強い月並みな「書物」などではなく、真に優れた本格的な「書物」であってほしいのです。というのも、月並みな「書物」では、恐らく、月並みな「精

神」しか学べないだろう。真に優れた「魂」と深く交わることによってこそ、初めて、その人も一人前の「精神」となり得るのである。古今東西を問わず、世に優れた書物は、数多くあるわけだから、その中から、心惹かれるものを選んで読めば、それでよいものである。その場合、ただ一度読めば、あるいは表面的な内容が分かったから、それでもうよいというものではなく、何度も何度も深く読む。その作者の「魂の鼓動」が生のまま聴こえてくるまで深く読んでほしいのです。そうでないと、いわゆる「書物」を深く読んだことにはならないからである。もし、その人の身のまわりに真に優れた「人物」がいるならば、何も本など読まなくても、その人とじかに深く交わることで、その人からいろいろ多くのことを直接的に学ぶことができ得るだろう。しかし、実際には、なかなか真に優れた「魂」とめぐり逢える機会は、少ないだろう。しかし、「書物」であるならば、その人がその気になりさえすれば、いつでもどこでも手軽に古今東西の真に優れた「魂」と深く交わることができ得るわけで、これ以上のものはないだろうと思う。

それでは、なぜそれほど真に優れた「書物」ということにこだわるのか、あるいは、なぜ真に優れた「魂」と深く交わることが必要だと力説するのかと問われれば、それは、若い時というものが、まさに「肉体的にも精神的にも成長期」にあたっているからである。まさにそういう時期であればこそ、真に優れた「魂」と深く交わることによって、その人の「精神」をしつかりと鍛え、育てておくべきなのである。月並みな「精神」と深く交わっても、恐らく、月並みな「精神」しか学べないだろう。やはり、真に優れた「魂」と深く交わってこそ、その人の「精神」も、一人前の優れた「精神」となり得るのである。もしその人が、自分自身の「精神」(特に「思考(思索)能力」)を真に鍛え、向上させたいと心の底からそう願っているならば、私は、何の躊躇もなく、真に優れた「魂」と深く交わることが勧めたい。そして、真に優れた「魂」と深く交わるのに一番簡単な方法の一つが、まさに古今東西の真に優れた「書物」と深く交わることなのである。

むろん、その人の身のまわりに真に優れた「人物」がいるならば、その人と直接(直に)深く交わることによって、いろいろ多くのことを学ぶことができ得るだろうが、いつも身のまわりに真に優れた「魂」が存在するとは限らないだろう。しかし、「読書」ならば、いつでもどこでもその人がその気になりさえすれば、気軽に古今東西の真に優れた「魂」と深く交わることができ得るわけであるから、これ以上のもはないだろうと思われる。それに生きている人間というのは、どうしても「生身の存在」であるがゆえに、いつでもどこで何をしでかすか分かったものではないが、すでに死んで評価の定まっている人であるならば、それほど裏切られることも少ないだろうから、すでに評価の定まっている真に優れた「書物」こそ、じっくりと時間をかけて深く読むのがよいわけである。

それでは、真に優れた「書物」とは、一体、どういうものかという問題になるかと思うが、真に優れた「書物」とは、すなわち、真にものを考えさせてくれる「書物」のことだ。なぜ、こんな簡単なことをわれわれは見失いがちなのだろうか。だとすれば、いわゆる「ハウツーものや実用書あるいは娯楽的なもの」は、それとはまったく相反する「書物」ということになるだろう。なぜなら、ものを考えさせるどころか、安易な答えや要領などを与えたり、あるいは真にものを考えることを娯楽は妨げることをしてしているのだから。もちろん、「ハウツーものや実用書あるいは娯楽的なもの」が、つまらない本などと言っているのではなく、ハウツーものや実用書などは、実社会で生きていく上で必要な知識や要領な

どを教えてください。それは、非常に便利であり、役立つことも極めて多いわけである。また、娯楽的なものも、われわれ読む側をいろいろ楽しませてくれるわけであるから、それらも必要不可欠なものなのである。ただ思うに、いわゆる「ハウツー」ものや実用書あるいは娯楽的なものは、狭義の「読書」（つまり真の「読書」）には、やはり向きの書物になるということである。なぜなら、真の「読書」に向いているのは、真にものを考えさせてくれる「書物」であり、それは、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などが深く眠っている、いわゆる「根源世界」へと誘うものであり、読者は、その「根源世界」から湧き出ている「源泉」の澄んだ水を飲むことによって、いわば「心の渇き」を深く満たすことになるからである。つまり、真に優れた「書物」というのは、読者を既成的な知識に満ちた「下流」から、目を「上流」へと向けさせ、そして、物事の湧き出づるまさにその「源泉」へと誘うものなのである。

一、読書の方法

ところで、若い時には、いろいろな「書物」をできるだけ数多く「乱読」しておくことを勧めたいと思うわけである。その「乱読」というのは、それほど深く読むというものではなく、ごく一般的に読んで意味や内容を理解すれば、それで十分なものであるが、これは、若い時（特に中・高・大学時代）にこそ、やっておくべきことなのである。若い時には、この意味合いがよく分からないものであるが、しかし、その後のその人の人生に極めて大きな意味を持って来るものなのである。そして、大学時代には、かなり時間を持って余している人たちも多いかと思うが、この時期にこそ、じっくりと腰を据えて、何か真に優れた本格的な「書物」を深く読んでほしいと思うわけである。ただ、あまり無理をして本ばかり読んでいると、精神衛生上あまりよくないので、各人が自分のペースで余裕を持ってゆっくりと行なえば、それでよいことである。そして、書物を読んでいて、特に気に入った箇所や心惹かれる文章などにぶつかった時には、そこに傍線（赤線）を引いたり、ノートに書き写してみることがも大事なことなのである。確かに、傍線（赤線）などを引いて、大事な書物をあちこち汚すのは、好きではないという人も多いかも知れない。しかし、その書物とできるだけ深く交わり親しむためには、よそ行きのつき合い方では、どうしても交わりが浅くなるので、自分の書物であるならば、もうどんどん傍線（赤線）や書き込みなどを入れて汚すべきなのである。なぜなら、そうすることによってこそ、書物との交わりが、より深まり、それだけ親密さを、より増すことになるからである。

また、気に入った文章を書き写すことに、一体、どういう意味があるのだろうか？ それは、ただ単に読むだけではなく、自分の手でもう一度「その文章」を一字一句丁寧に書き送ることによって、その文章の内容をより深く理解でき得るとともに、その魅力的な「文章表現」のいわば「秘密や秘訣」などを学び知ることにもなるのである。つまり、それは、絵画における「模写」とまったく同じことであり、なぜ、画家は、気に入った他人の絵を、もう一度、自分の手でそっくり描き送るような「模写」などを行なうのだろうか？ それは、いわゆる「模写」することによって、その絵をただ単に外から見て理解するだけではなく、実は、その絵を「内から観て」理解するということであり、それは、わが身を以ってその絵の細部の微妙なところまで深く厳密に理解することになるのである。——つまり、

その絵の「制作過程」（真つ白なカンパス状態から完成された状態まで）を、自分の手で描き辿るといふ「追体験」をすることによってこそ、その絵の作者の「制作過程」での実に様々な「秘密や秘訣」などを、まさにわが身を以って学び知ることになるのである。

また、昔は、よく有名な古文の文章を「暗唱」させられたりしたものである。それには、一体、どういう意味があったのだろうか？ それは、ある「文章」をそのままそっくり「暗唱」することによって、最初は、その正確な「意味合い」はよく分からなくても、まず、その文章の持つ「雰囲気やリズム」などになじむことになる。そして、何度も声に出して「暗唱」したり、「心の中」で「暗唱」することが多くなれば、自ずとその文章のなかに深く溶け入っては、その文章の「言葉の流れや抑揚」などを、そのままわが身を以って内から感じ知ることになるとともに、それは、まさに「作者の心」と「自分の心」とがより深く溶け合い、自分自身がその作者の「心情」となって、その文章を見ることができるようになるのである。——つまり、「暗唱」とは、読者が「ある文章」とほんとうに深く交わるための極めて有効な方法であるとともに、その「作者の精神」（心情）とも深く交わり、また、深く理解するための極めて有効な方法の一つになるということである。

さて、文章を読んでいて、何か気づいたこと、あるいは思いついたことがあったら、できるだけノートに書きつけるようにした方がよいのです。それは、どんなに下手な、あるいは断片的な言葉であっても構わないので、とにかく何か思いついたこと、あるいはその時考えたことなどを、どんどんノートに書きつける習慣を、若い人には身につけてもらいたいと思うのです。なぜなら、ただ書物を読むだけでは、まだ半分なのであり、書物を読んでいて、何か感じたことや思いついたことなどがあつたならば、どんどんノートに書きつけておくべきなのである。そうすることによって、自らものを考える習慣が芽生え、育つて来るからである。これは、極めて大事なことであり、書物をただ読むだけではなく、実際に書くことによって、より理解を深めることになるとともに、自らものを考えるという真の「思考（思索）能力」が芽生え、育つて来るものであり、これこそ、真の「読書」によって得られる最大の利点の一つなのである。なぜなら、真の「読書」とは、あれこれの知識を得ることが、真の目的ではなく、むしろ、最終的には作者の「魂の鼓動」（「魂の声」）を生のまま聴くことではあるが、それとともに、自ら物事を深く厳密に考えることのできる、真の「思考（思索）能力」を養うことにもなるからである。われわれは、特に若い人の場合、自ら物事を深く考えて、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを厳密にとらえることは、まだなかなかできにくい段階であり、多くの場合、人から聞いたことや何かで読みかじった他人の意見などを、そのまま自分の意見のように思つて使つていくことが多く、自ら物事を深く考えるという「思考（思索）能力」は、まだ不十分な段階なのである。しかし、書物を読んで、そこで感じたことや思いついたことなどをノートに書きつけるようにすれば、自らものを考える習慣というものが芽生え、育つて来るわけであるから、若い人には、ぜひともただ本を読むだけではなく、思いついたことをどんどんノートに書きつけることを勧めたいと思うわけである。

そして、そのノートに書き留めたものを、何度となく読み返してみること、極めて大事なことなのである。読み返してみると、その時は、そう思ったことでも、あとで読み返してみると、自分でも赤面するような内容のものもあるだろうし、また、時には、なるほどと関心するようなものもあるかも知れない。たとえそれがどういふものであれ、そこに

書き留められているものは、他人の考えでも他人の意見でもない、自分の力で考えた自分の文章、自分の言葉、自分の考え、自分の思い、自分の意見、自分の思想、自分の感性、自分の価値観、自分の道徳観や倫理観、自分の人生観、自分の判断、自分の志向、自分の性格、その他、そういうものに満ちているわけである。むろん、それは、まだ磨きのかかっているかも知れない。それは、それで少しも構わないのです。なぜなら、初めて自分の「思いや考え」などを誰の目も気にせず、思う存分に書き記した文章や断片的な言葉に満ちているからである。そして、何度ともなく読み返しているうちに、ここは、こういうふうにしたほうがよいか、ここでは、この言葉ではなく、この言葉を使って表現した方がよいか、これは、ずいぶん勘違いをしているなあとか、あの時は、そう考えたけれど、今ならこう考えたら、また、あの時は、こういうふうに表示したが、今ならこういうふうに表示するだろう。あるいは、あの時は、ああいうふうに感じたけど、今ならこういうふうに感じるなあとか、あの時には、ああいうふうに言っただけど、今ならこういうふうに言うだろうか、あれこれ思いめぐらすことができるわけである。

それでは、そういうことにいったいどういう意味があるのかと言えば、それは、その当時の、その人の「内的世界」と現在のその人の「内的世界」との比較対照ができるということである。そして、比較対照することによって、自分がどのように成長してきたか、また、自分がどのように変化してきたか、あるいは自分がどのように向上してきたかが、はっきりと分かるということである。あの時、わからなかったことも、今ならよくわかる。あの時、理解できなかったことも、今ならほぼ理解できる、というように、自分の「内的成長過程」を目的^ま、あたりに^す、することができるようである。そして、何度も読み返し、その時に、思いついたことや考えたことなどを、新たに書き記す^{しる}ことも、何度も繰り返しることによって、自らものを考える力や判断する力、また、自ら物事を評価する力や認識する力なども育つて来るのである。つまり、ただノートに書きつけるだけでも、自らものを考える習慣が芽生え、育つことにはなるが、それに加えて、何度も読み返すことによってこそ、さらに自ら物事を「判断し、評価し、認識する」力も芽生えさせ、育てることにもなるわけである。だからこそ、書きつけるだけではなく、読み返すことが、より大事なことになるわけである。——それでは、「読書」とは、本を読み、想いついことを書き留め、それを読み返し、新たに自分の「考えや想い」などを書きつけるだけで十分かと言えば、もちろん、それだけではまだ十分とは言えないのである。それでは、それ以外にいったい何があるのかと言えば、まだまだいろいろとあるのである。

二、狭義の「読書」

むろん、「読書」というのは、その人が読みたいように読めば、それで十分なものであり、われわれがとやかく言う問題ではないのかも知れない。それゆえ、あくまでも参考までに狭義の「読書」について、順を追って話をしてみたいと思う。——それでは、その狭義の「読書」とは、いったいどういうものであるかを少し書き加えてみたいと思うが、まず最初は、どういう場合でも、とにかく「一読」「通読」してみることなのである。つまり、取りあえず、最初から最後までひと通り読み通してみることである。そして、この時

には、文章の意味や内容がよく分からないところがあっても、少しも構わずどんどん読み進んで、とにかく、一度は、最初から最後まで軽い気持ちで読み通してみることによって、一体、どういうことが書かれているのか、その内容を大ざっぱにつかめば、それで十分な段階である。むしろ、その時に、気に入った文章や重要だと思える箇所があれば、傍線（赤線）を引いたり、書き込みを入れたり、また、想いついたことや考えたことなどをノートに書きつけたりすることも、「一読」「通読」だからと言って、遠慮せずにどんどん積極的に行なってほしいのです。そして、そのようにして、「一読」「通読」がひとまず終わつたならば、今度は、本格的な「精読」の段階に入っていくことになるわけである。

さて、その「精読」の段階であるが、それは、できるだけ一字一句しっかりと理解しながら、前に進んでいくものである。できれば、その文章の意味だけではなく、言葉の流れなり、言葉の強弱なり、言葉の抑揚なり、言葉の姿・形なども、深く味わってもらいたいと思うが、それは、「味読」のところでは話をしたと思うので、ここでは省略したいと思う。そして、書物を読んでいて、どうもよく分からない箇所、また、内容がよく理解できない箇所が出てくるかと思うが、その時には、何度かその箇所を読み返してみても、どうしても理解できない時には、それはそれとして、その場でよく理解できなくても、それほど気にすることはないので、それは、そのままにして前に進んでいけば、それでよいことである。そして、あとになって、あれは、一体、どういう意味だったのか、時々想い出して考えてみるのが、何より大事なことになるわけである。それは、「心の中」に何か未だ解けない問題や疑問点などを幾つか蓄えておくということであり、「……あれは、一体、どういう意味なんだろうか、あれは、一体、どういうことなんだろうか」というように、「心の中」に幾つかの疑問や問題点を蓄えておき、時々そのことを想い出しては、あれこれ独り考えてみるのが、極めて大事なことになるわけである。

それは、何かを見たり、聞いたりしながら、それに沿ってものを考えたり、また、他人と話をしながら、それに沿ってものを考えるという場合とは違って、その人の「心の中」で孤独「自問自答」を果てしなく繰り返すことであり、それこそは、まさに「純粹思考」（純粹思惟）であり、その時、その時に対応するためにものを考えるという、いわゆる「実践的思考」とは違って、その人の「心の中」で孤独「自問自答」を果てしなく繰り返すことこそ、まさに「純粹思考」（純粹思惟）であり、それは、現実的な諸問題について臨機応変に対応するための「思考（思索）活動」ではなく、むしろ「冥想」に近いものである。つまり、独りぼんやりと「心の中」に蓄えられている幾つかの疑問や問題点などを思い浮かべては、「……あれは、一体、どういう意味なんだろう、あれは、一体、どうということなんだろう」というように、取りとめのない「思考（思索）活動」であるが、その取りとめのない「思考（思索）活動」こそは、まさに「純粹思考」（純粹思惟）であり、その人の「心の中」で孤独「自問自答」を果てしなく繰り返しては、問い直すことなのである。そして、そういうことを行なっていると、「……あつ、あれは、こういう意味だったのか、あつ、あれは、こういうことだったのか」と、ハッと思い至ることがよくあるわけである。つまり、「心の中」に幾つかの疑問や問題点を蓄えていて、時々そのことを想い出しては、あれこれ考えてみることによって、その時には気づかなかつたこと、あるいはよく分からなかつたことが、ある日、ある時、何らかのきっかけで、ハッと思い至ることがよくあるわけである。「……ああ、あれは、こういうことだったのか、ああ、あ

これは、こういう意味だったのか！」と、ハッと思い至ることがよくあるわけである。そして、そういうことを繰り返すことによってこそ、自らものを考えるところの「思考（思索）能力」そのものが、確実に育っていくことになるのである。

例えば、ある学者が、或る「研究テーマ」を決めて、あれこれ深く研究をしていけば、どうしてもよく分からない様々な「疑問や問題点」にぶつかることが、非常に多くなるかと思う。その場合、学者は、その疑問や問題点を「心の中」に蓄えておき、事あるごとにそのことを思い出しては、あれこれ深く考え、想いをめぐらすという「自問自答」を「心の中」で果てしなく繰り返し返すことになるかと思う。そして、ある日、ある時、何らかのきっかけから、突然、今までどうしても解けなかった難題が、パッと解ける瞬間を迎えることにもなるわけである。——例えば、アルキメデスという人は、ある日、大衆浴場にゆったりとつかっていた時に、「あつ、そうか！」という感じで、ハッとあること（つまり「浮力の法則」）に気づいたというのと全く同じように、いつも「心の中」に幾つかの疑問や問題点などを蓄えておいて、事あるごとに「心の中」で孤独「自問自答」を何度となく繰り返すことによってこそ、やがては人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを深く厳密にとらえることができるようになるのである。

つまり、「純粹思考」（純粹思惟）というのは、差し迫った「諸問題」に対して、どのように対応して行くかという「実践的思考」とは違って、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを深く厳密に探究して行く時に行なわれる「思考（思索）活動」であり、そして、書物などを読んで、よく分からない箇所、あるいは意味のよく理解できない箇所などを「心の中」に蓄えておいて、事あるごとにそのことを思い出しでは、「心の中」で孤独「自問自答」を何度となく繰り返し返すことによってこそ、ある日、ある時、何らかのきっかけによって、突然、「……あつ、あれは、こういうことだったのか、あつ、あれは、こういう意味だったのか」と、ハッと思い至ることがよくあるわけである。そして、その時、その人は、まさに「自らものを考える」ということを実践していた状態であり、そういうことを何度も何度も繰り返し返すことによってこそ、その人のいわゆる「思考（思索）能力」は、真に養われ、育っていくことになるのである。

そのように、書物を「精読」していけば、必ずいろいろな疑問点や分からない箇所などにぶつかることになるが、そのような時には、何度か読みなおして、それでも理解できないような時には、無理に理解しようと思わず、その時には、そのままにしておいて、次のところを「精読」していけば、それでよいわけである。そして、よく分からなかった箇所は、「心の中」に蓄えておいて、事あるごとに思い出しては、それをあれこれ考えることによつて、ある日、ある時、何らかのきっかけによつて、突然、それが理解できる日を迎えることができるわけである。そして、真の「読書」とは、まさにそういうことを繰り返し返すことである。だとすれば、いわゆる「ハウツーものや実用書あるいは娯乐的な本」などは、狭義の「読書」（つまり真の「読書」）には、やはり不向きなものになるだろう。つまり、狭義の「読書」に適した書物というのは、あれこれの月並みな内容や読んですぐ分かるような「安易な書物」のことではなく、読んでも読んでもなお汲み尽くせないほどの深みと内容とを宿した「書物」のことであり、そういう真に優れた「書物」をじっくりと時間をかけて深く読むことによつてこそ、その人の自らものを考えるという真の「思考（思索）能力」が真に養われ、育つことになるのである。

そのように狭義の「読書」というのは、一度読めば、それでよいというものではなく、また、表面的な「意味や内容」が分かったから、それでよいというものでもない。それでは、どういうものと問われれば、それは、いわゆる「読書百編」ということである。何度も何度も繰り返し繰り返し深く読み返してもらいたいわけである。そして、それが真に優れた「書物」であるならば、その書物を「読み返す」たびごとに、何か新しい発見が必ずあるはずである。前、読んだ時には気づかなかったことが、今度、読んで初めて気づくということも、よくあることなのである。また、そういうふうには真に優れた「書物」とは、読んでも読んでもなお汲み尽くせないほどの深みと内容とを宿しているものであり、それこそ、まさに真に優れた「書物」と呼ぶにふさわしいものである。

そして、そういう「精読」もひと通り終わつたならば、今度は、その書物を深く味わいながら読むという「味読」や「熟読」の段階に入るわけだが、前の「精読」の段階で、ほぼその「意味内容」を理解できたわけであるから、ここでは、その「文章を深く味わう」ということであり、書かれている意味内容はもとより、その言葉の使い方や言葉の間の取り方とか、言葉の組み立て方、全体の構成の仕方、また、文章の書き方、表現の仕方、言葉の流れ、言葉の強弱、言葉の色艶、言葉の姿・形、文体、その他、そういうものを深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」。そして、その作者の精神と深く交わって、楽しむ。また、その作者の心情と深く溶け合って、喜ぶ、ということが、まさに「味読」であると言つてもよいのだろう。そして、そのように深く親密に交わつた「書物」というものは、いわば「愛読書」として、手元に大事に置かれることにもなるのだろう。そして、事あるごとに読み返しては、新たな思いや新しい発見などをするかも知れないし、そのようにして時には一生その人の手元に置かれて、その人に大きな影響を与え続けることにもなるのだろう。

三、愛読の極み

さて、ここまでが一般的な「読書」段階であり、多くの人たちが実際に行なっている、いわゆる「読書」というものではないだろうか。それでは、それより深まった「愛読」というのは、いったいどういう段階かと言えば、それは、まさに「精読」や「味読」などの段階が、さらに深まった状態ということである。

例えば、シュリーマンは、ホメロスの「叙事詩」を深く愛読したのであって、「精読」や「味読」の段階で留まった人ではない。もし、シュリーマンが、ホメロスの「叙事詩」を「精読」や「味読」だけで終わっていたならば、彼もまたただの賢い「読者」の一人に過ぎなかつたらう。そして、「こんな作り話やうそなどにはつき合いきれない」と言つて、一笑に付してしまつたかも知れない。しかし、シュリーマンは、あくまでもホメロスの「叙事詩」を深く愛読したのであって、書かれている内容が作り話やうそであるなどとは露ほどにも考えなかつたし、また、考えたくもなかつた。なぜなら、それは、自分をあれほどまで鼓舞してくれた詩人の性格の誠実さを疑うことであり、また、ホメロスという優れた人物に対する最大の侮辱だと考えていたからに違いない。——つまり、書かれている内容をすべて受け入れるか、それともすべて否定するかどちらかだ。書かれている内容が、たとえ作り話であろうと、それをそのままそっくり受け入れることが、

すなわち、ホメロスという「人間の魂」にじかに触れる唯一の道だ。ほかに道はない。シュリーマンは、相手を信頼しきった愛読者として、ホメロスの「叙事詩」に推参したのである。もし彼が「精読」や「味読」の段階で留まっていたら、彼もまた賢い「読者」の一人で終わってしまい、彼のその後の様々な有名な「発掘」や「発見」もなかっただろう。

シュリーマンは、ホメロスの「叙事詩」を原語で読みみずみずまで朗々と暗唱することができた。そして、発掘の休憩の合間には、そこで働いていた労働者たちにホメロスの「叙事詩」の一節などを読んで聞かせていたという。これは、極めて重要な意味を宿しているのであり、原語で読みみずみずまで朗々と「暗唱」できたとは、すなわち、それだけ「作者の心」を「自分の心」としていたということであり、そういう意味からいっても、ホメロスの「叙事詩」をシュリーマンほど深く読んだ人は、少ないのだし、また、彼ほどホメロスという「人間の魂」とじかに深く交わった人も少ないのである。まさに「魂の鼓動」を生のまま聴いた数少ない一人なのである。「愛読」とは、そこまでいくことだ。相手を信頼しきって深く交わることだ。たとえ作り話であろうとそうであらうと構わない、書かれているものをそのままそっくり受け入れることだ。これが「愛読」の極致であり、それが「作者の魂」と最も深くじかに交わる唯一絶対の道なのである。自分に都合のよいところは、好んで受け入れ、気に入らないところを読み流してしまう。また、自分に都合のよい知識だけを読みあさることが、どうして真の「読書」となり得よう。そういう自分の小賢しい考えや思いをひとまずすべて置いて、相手を信頼しきった謙虚な気持ちで、その「書物」に推参しなければ、「書物」の方だつて読み手を馬鹿にして、その奥底に深く眠る「真意」を明かしてはくれないだろう。せいぜい表面的な意味内容を明かしてくれるだけである。また、そこまで行かなければ、書物との「運命的な出逢い」とはなり得ないだろうし、また、その人の「内的世界」を根底から変革させるような劇的な「心的事件」なども起こりやうがないのである。——例えば、伊藤仁斎という人は、何年もかけて、『論語』や『孟子』という書物を深く読んだそうであるが、それは、何も通り一遍の意味内容を読み取ろうとしたのではないだろう。伊藤仁斎という人がやろうとしたのは、『論語』や『孟子』という信頼できる書物と深く交わり、そして、その書物を深く厳密に読むことによつてこそ、まさに孔子という人間の「魂の鼓動」を生のまま聴こうと全精力を傾けて取り組んだのである、その結果として、孔子という人間の「魂の鼓動」（つまり「魂の声」）を生のまま聴くことのできた、数少ない学者の一人になるのだろう。

つまり、「愛読」とは、相手の「魂」と深くじかに交わろうとすることであり、書かれている内容のどこどこが誤っていると正しくないとか、そういう重箱の隅を突くようなつき合い方ではない。それは、「精読」や「熟読」の段階のことだ。「愛読」段階になるとは、そういうところでつまずいて、前に進めなくなるといふ段階ではない。人間は、間違いをおかすこともあれば、思い違いをすることもあるし、また、時代による制約というものもあるだろう。「愛読」段階というのは、書かれている個々の文章はもとより、その書物の背後に存在する、作者の大きな「魂」とめぐり逢い、そして、その大きな「魂」とできるだけ親密に交わろうとすることである。

例えば、ゲーテの『ファウスト』を深く読んで、その一文章一文章の表現の的確さに今さらのように感心するとともに、『ファウスト』という書物全体のすみずみにまで行き渡っているゲーテという人間の「精神（魂）の躍動」が生き生きと感じられるであろう。「愛

読」とは、そのゲーテの大きな「魂の鼓動」をできるだけ生のまま聴くということである。そして、そのゲーテという「人間の魂」と「自分の魂」とが「書物」を通して、深く交わって、楽しむ。あるいは深く溶け合って、喜ぶ。それが「読書の楽しみ」であり、また、それが、いわゆる「書物を友とする」という言葉の「真意」になるかと思う。

例えば、ある書物を読んでいて、自分の「考えや想い」などに合ったものは、受け入れ、自分の「考えや意見」と違ふところは、受け入れない。それでは、それを生み出したあるがままの「作者の魂」とめぐり逢えないだろう。あるがままの「作者の魂」とめぐり逢うためには、自分のあれこれの「考えや想い」などは、ひとまず置いて、その書物の中に深く溶け入っては、その「作者の魂」と一体となる以外に、いったいどんな方法があるというのだ！ ほかに「いかなる方法」もないのである。

「愛読」とは、そこまで行くことだ。自分のあれこれの「考えや想い」などは、ひとまず置いて、いわば「白紙の状態」になって、その「書物」に推参し、そこに書かれているものを、そのままそっくり受け入れることだ。そして、その文章の中に深く溶け入っては、「作者の心」と「自分の心」とが深く溶け合い、終には「一体となる地点」へと、すなわち、「作者の心」は「自分の心」、「自分の心」は「作者の心」というところまで行くことだ。そして、その地点こそは、まさに人間理解の「究極の地点」であり、その地点を、例えば、伊藤仁斎の言葉を借りて表現すれば、それは、まさに「……其の警咳を承けるが如く、其の肺腑を視るが如く、真に、手の舞ひ、足の踏むことを知らず。……」というように、まさに「人間理解の極致」まで到達でき得るということである。——つまり、「作者の心」と「自分の心」とが深く溶け合い、終には一体となることよってのみ、初めて、「作者の「魂の鼓動」(つまり「魂の声」)がほんとうに生のまま聴こえて来るのであり、「作者の魂」とほんとうに深くじかに交わる唯一絶対の道なのである。

だからと言って、明らかに間違っているものを盲目的に信じるということでは決してない。ただ作者の「魂の鼓動」を生のまま聴くためには、まず、「作者の心」と「自分の心」とが深く溶け合い、終には一体となるところまで行って、そこで作者の「魂の鼓動」を生そのまま聴き、そのあとで書かれている内容が正しいのか間違っているのか、じっくりとその「真偽」を深く厳密に行なえば、それでよいことである。そして、その人が、どうしてそういう間違いをおかしたのか、或いは、なぜ故意にそういうことを書いたのか、その他、その人の「心の動き」や「真意」などを深く厳密に探れば、それでよいことである。最初から、「この箇所は、間違っている、これは、うそだ」などと言って、相手を批判しながら、書物を読んでいたのでは、その「作者の魂」と深く交わることなどでき得ないだろう。大事なのは、自分自身が「作者自身」となって、その作者の「心の中」をそのままそっくり生きてみるという、「追体験」を試みることによってのみ、その作者の「魂の鼓動」(つまり「魂の声」)を生そのままそっくり聴くことができ得るのである。

そして、そういう狭義の「読書」に向いているのは、何度も繰り返し返すように、ハウツーものや実用書あるいは娯乐的な「本」などではなく、数多くある古今東西の真に優れた「書物」の中から、どれでもその人の気に入ったものを選ぶことを勧めているのであり、そういう書物こそ、じっくりと時間をかけて深く読むべきものなのです。そして、真に優れた「書物」というのは、真にものを考えさせてくれる書物であるとともに、読んで読んでもなおお汲み尽くせないほどの深みと内容を宿した書物のことなのである。そして、そう

いう「書物」こそは、若い人たちには、特に大事なものとなるわけである。なぜなら、若い人たちは、物事を「自ら考え、自ら判断し、自ら評価する」ことなどが、まだ十分にできない段階であり、自らものを考えるということを真に養い、育てるためには、狭義の「読書」こそ、もつとも適したものになるからである。

そして、この狭義の「読書」こそは、人間の「思考（思索）能力」を真に育てる最も有効な方法の一つであり、しかも、それは、誰にでもどこでもできる極めて簡単な方法なのである。ならば、まだ「思考（思索）能力」の未熟な若い人たちは、進んで、この狭義の「読書」を行なうべきではないだろうか。特に大学生などは、時間を十二分に持ち合わせているわけだから、この狭義の「読書」は、ぜひとも行なっておくべきなのである。この高度「機械文明」の時代に、本を読むなどは、時代遅れだと思う人もあるかも知れない。本など読まなくても、テレビやパソコンあるいはニューメディアからいくらでも必要な情報や知識などは得られるではないか、なぜ、本を読むなどという陳腐な行為が今なお必要なのかさっぱり分からないと思う人もあるかも知れない。確かに、今後、ますますテレビやパソコンあるいはニューメディアなどが高性能化すれば、本など読まなくてもよい時代が、あるいはやって来るのかも知れない。しかし、自ら「ものを考え、判断し、評価し、認識する能力」というものは、ただ単にテレビなどを受け身的に見聞きしていたのでは、半永久的に育てることなどでき得ないのである。もしその人がほんとうに自分の「思考（思索）能力」を真に鍛え、育て上げたいと、心の底からそう願うならば、一生に一度は、この狭義の「読書」を本格的に行なわれなければならない。そして、それを行なう時期は、「肉体的にも精神的にもまさに成長期にあたる」若い時にこそ、そのなかでも、大学生は、十分な時間を持ち合わせているわけだから、できるだけ多くの書物を読みあさる「乱読」とともに、じっくりと腰を据えて、「一冊の書物」を本格的に深く読むという狭義の「読書」を、ぜひとも行なっておくべきだと思うわけである。

四、結び

例えば、乳幼児期には、母親をはじめ、保育園や保育所、或いは幼稚園の人たちと一緒に絵本や童話などを読んだりして、言葉に慣れ親しむ程度でよいだろうし、小学校時代は、読みたい本を読みたいように読んで、書物や文章などに慣れ親しみ、いわば「読書の習慣」を身につければ、それで十分なのである。

そして、中・高時代になれば、自我がはっきりと目覚め、異性への関心も高まり、また、いわゆる「好き嫌い」の激しくなる時期でもあるが、この時期には、できるだけいろいろなジャンルの書物を幅広く読みあさる「乱読」などを勧めたいと思う。というのも、この時期は、学校の勉強や受験勉強、あるいは様々な部活動などで忙しい人も多いだろう。また、様々なものへの好奇心も極めて旺盛になって、一冊の「書物」をじっくりと深く読むよりも、興味や関心を持った様々なジャンルの書物を幅広く読みあさって、その人の「内的世界」をより「拡大・拡充」しておいた方がよいのであり、この時期には、できるだけいろいろなジャンルの書物を幅広く読みあさることを勧めたいと思う。むしろ、一冊の「書物」をじっくりと時間をかけて深く読んでもよい時期ではあるが、それは、もうどちらでも各人にまかせれば、それでよいことである。

そして、大学時代になったならば、できるだけ数多くの書物を読みあさる「乱読」だけではなく、じっくりと腰を据えて、一冊の「書物」を本格的に深く読むという狭義の「読書」を行なうことを勧めたいと思うわけである。というのも、この時期になれば、古今東西の真に優れた「書物」を十分に読みこなせるだけの「知的能力」も備わってくるわけであるから、ぜひとも狭義の「読書」を行なってほしいと思うわけである。むろん若い時には、いわゆる「青春」を思いっきり謳歌したいという気持ちも、非常に強いだろうから、各自それぞれ大いに心ゆくまで楽しんでもらいたいと思うが、それと同時に、自分の「内的世界」を真に育てるための狭義の「読書」もぜひとも行なってもらいたいと思うのです。若い時には、その意味合いがよく分らないものであるが、しかし、そういうことを行なうことによってこそ、その後の、その人の人生に大きな意味を持つてくるわけである。

*

*

例えば、本など読んで、一体、何になるのかという問いに対して、それは、様々な分野の「知識や情報」などが得られることもあるが、それ以上に大事なことは、自分自身の「思考（思索）能力」そのものを真に鍛え、育て上げるためには、まさに「読書」が最適ではないかと思うからである。そのためにも、月並みの書物ではなく、真に優れた「書物」を深く読んでほしいと思うとともに、若い時こそは、一冊の書物との出会いが時として自分の人生を劇的に変える「運命的な出会い」ともなり得るものである。若しも自分自身の「思考（思索）能力」を真に鍛え、育て上げたいと心の底からそう願うならば、私は、何の躊躇もなく、真に優れた「書物」を深く読むことを勧めたい。数年後、間違いなく、その人の「自ら考え、自ら判断し、自ら評価でき得る」という、「思考（思索）能力」というものは、今より遙かに「向上している」ことは間違いないこととなるのである。……

一般的に、世の中は、自分の「力量」でしか見えないものである。例えば、小さな幼児たちは、小さな幼児たちの「力量」でしかこの世の中は見えてはいないものである。それは、つまり、この世の中の実に様々な「表面的な現象」などをあれこれ見聞きしては、それをそのまま「事実」（或いは「真実」）だと思いついておられることである。しかし、それは、絶えず変化して止まない、いわば「仮相」（つまり「仮の姿」）に過ぎず、もつと奥にある、この世の中の実に様々な人間や物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを真にとらえるためには、それこそは、まさに「実相」（つまり「真の姿」）であるが、それは、自分が真に「内的成長（成熟）」しない限りは、難しいことになるのである。

例えば、プラトンの『洞窟の比喩』というものは、非常に「有名な比喩」であるが、それは、多くの人たちは、壁に映った「影」を見て、それをそのまま「事実」（或いは「真実」）だと思いついておられるのである。しかし、それは、絶えず変化して止まない、いわば「仮相」（つまり「仮の姿」）に過ぎず、もつと奥にある、この世の中の実に様々な人間や物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを真にとらえるためには、それこそは、まさに「実相」（つまり「真の姿」）であるが、それは、自分が真に「内的成長（成熟）」することによってこそ、初めて、真に観て取ることが可能になるのである。そうでなければ、徒然草の仁和寺の法師のように、まさに「山までは見ず」（それは「人生の本堂」を見ること）もなく、この世の実に様々な目先の「欲望や快樂その他」などを貪欲にむさぼることだけで、いわば「自分の人生」を終えてしまうということである。

*

*

ところで、最近は、若い人たちがあまり「本」を読まなくなったということが、よく話題にのぼり、そして、それを心配する有識者たちも非常に多いわけである。しかし、「本」を読みたいという気持ちがあったく生じて来ないのに、無理やり本を読まそうとしても、かえって、その人を「本嫌い」にしてしまうだけだろう。それよりも、若い時には、必ず一度や二度ぐらいは、むしろように「本」が読みたくなる時期が必ず訪れるものであるから、その時にこそ、できるだけ多くの書物を読んでもらいたいと思うとともに、もう一つは、ぜひとも一生に一度は、いわゆる確かな手応えのある「書物」を、じっくりと時間をかけて深く読むという狭義の「読書」を行なってもらいたいと思うのです。その理由は、もう何度も話してきたので、ここでは省略をするが、それとともに、やはり読書の習慣というのは、若い時にこそつけておかないと、大人になってから、さあ、書物を読もうとしても、なかなかなじめないものであり、それゆえ、若い時から、読書の習慣をしつかりと身につけておくことが、大人になってからも、大いに役立つと言ってもよいのだろう。そして、できれば、自分の「心の中」にいえば「心の図書館」を設けて、そして、今まで読んだ本などの内容を簡単に整理して記憶しておけば、必要な時に、いつでも必要な本（と知識）を取り出せるわけだから、まさに「心の図書館」こそは、その人なりに消化し得た様々な「知識の宝庫」であるとともに、その人にとっては、一生の「大きな財産」ともなり得るものではないだろうか。

*

*